

清原深養父旧蹟きよはらのふかやぶのきうせき

〔大和大路三之橋より南三町許東側、三栗何某といふ民家の奥なり。相伝ふ、此屋敷方廿間、深

養父の故宅の跡にして、竹林に古井あり、これむかしのしるしなりといふ。又東の奥に古墳あり、これ深養父ふかやぶ元輔もとすけ清少せいせう納言なごんなどの跡なりといふ、詳ならず。南の隣家に小堂あり、観音を安ず、深養父が念持仏なりとぞ。地の主三栗氏みくりに旧記なし、漸慶長年中けいちやう已來の家系ありて慥に清原の後裔とあり。又家に鎗長刀を家蔵とす、これは豊臣秀次公とよとみひでつぐより拝領すといふ、其頃は少祿も賜りしと云伝ふ。前にいふ如く、此ほとりの地名は月輪つきわといふ事旧記に見えたり、左に記す。又此町の字を阿保町あぶといふ、此由縁さだかならず。三栗が家系に東の山を暗部山くらぶと書り、阿保あぶは暗部の訛となり、これも又詳ならず〕

袋草紙云

経信卿つねのぶの難後拾遺云、輔親すけちかが語りしは、能宣よしが桂の家に会して又の日、元輔もとすけが月輪といふ所に同人ととま

りたりしに、かはらけ輔親すけちかとれを云侍ひを、能宣はえつかうまつらじと云侍しを、なをなど元輔申侍しかば、なまじゐにかはらけとりて読侍る。云々。

かつらなる所にまいらんとすと人にいひ侍し、

そこにはまからで月の輪といふ処にまかり帰て、

家集 月の輪にあらたまるともしらずして桂はまたや君を侍らん

元 輔

○天武天皇

舍人親王日本紀作者

貞代王

有雄

通雄賜清原姓

海雄筑前守

房則豊前守

深養父内匠頭藏人所雑色

顕忠下野守

元輔肥後守

清少納言